

日本佛教の二大發達

鷺尾順敬

日本佛教の二大發達と云ふ題を御送り致して置いたのであります。私は平生、日本の佛教の歴史の研究に興味を有ちまして、此方面に心掛けて居るのであります。別に得たるところもないのでありますけれども、今晚斯う云ふ御席で御話し致しますことは誠に光榮に存じます所であります。

日本の佛教と申せば、勿論佛教史の上から見れば一部分のことであり、佛敎史は印度より始まるのでありますから、一部分のことでもあります。併し實際は日本の佛教といふものは日本に於いて一種の發達をしたものと思はれるのであります。御承知の如く、日本に佛教が渡來しましたから、千三百餘年にもなりますが、其間の形勢を見ますと、日本の佛教といふものが、日本で成立して居るのであります。殆ど日本人の手に作り出されたものかの如く思はれる位に特殊の發達をして居るのであります。固より印度に起り、西域地方に弘まり、それから支那地方に弘まり、朝鮮を経て、日本に傳はつたのであります。日本へ渡來してから、日本人の頭腦に解釋せられて發達をして居るのであります。其所は私が日本の佛教歴史の研究をして、大に興味あるやうに思つて居るのであります。けれども今日まで日

本の佛教といふやうな特殊の發達のことは普通に領解せられて居らないやうであります。實際は最早、印度の佛教でも、支那の佛教でもなくして、日本の佛教と云ふものが、千三百餘年の間に成立して居る語を換へて言へば、日本の佛教は日本人の精神的專業の建立ではないかと思ふのであります。其意味で私の考へて居る所を御話し申して御批評を仰ぎたいのであります。

實は私は今申しまするやうに、佛教は長い歴史を有ち、廣い面積を有つて居るのでありますが、其長い歴史とか廣い地理上の關係に就いては未だ十分研究したのでありません、印度の佛教に就いても西域支那の佛教に就ても私の知る所は甚だ貧弱なのであります。それで今日本の佛教の發達といふことを御話し申すに就て比較研究せずしては日本の佛教の特殊の發達が説明せられませんが、けれども他の方面の智識は不十分であり且つ今晚其御話を致す暇もありません。それで要領を得ないことになるかも知れません。今日佛教を地理の上から見まして、南方佛教とか北方佛教とか云ふ言葉が行はれて居る。それは私が申すまでもなく御承知のことでありましょう、南方佛教といふのは即ち錫蘭、暹羅等に弘まつて居る佛教であり、此方佛教とは即ち西域地方に弘まり、支那に弘まり、さうして朝鮮に傳つたものであります。この南方佛教と北方佛教とは餘程風が異つて居るやうであります。日本の佛教は大體に於て西域から支那朝鮮を経て來たのでありますから、北方佛教の系統に屬して居るのであります。申すまでもなく漢譯の大藏經といふものが日本の佛教の根柢をなして居るのでありますから所謂北方佛教に屬して居りま

す。けれども北方佛教の中では、日本の佛教といふものは餘りに變はつたやうになつて來たと思ふのであります。北方佛教といふものは、印度から西域に弘まり、現今の地理上所謂中央亞細亞の地方に弘まり。それが西北方から支那へ這入つたのでありますが、其佛教といふものは至極雜駁なものであります。申さば佛教といふ名の下に印度及び印度以北以東の哲學も宗教も風俗も皆這入つて居るやうな事實があるのであります。今日の漢譯大藏經といふものも、矢張り種々雜多なことが這入つて居りますが、其中から日本の佛教といふものが出て居るのでありますけれども。私は若し南方佛教北方佛教といふやうなことが言へるならば茲に東方佛教といふ名を立て、宜からうと思ふのであります。即ち東方佛教の獨立といふことが言へる。南方佛教に對して東方佛教といふものが成立つて居る。日本の佛教の歴史から研究すると、どうしてもさう云ふものがある。印度の佛教でも支那の佛教でもない、日本人の精神的事業として成立して來たものである、斯う云ふ考を有つて居るのであります。若し其南方佛教といふことが云へ、北方佛教と云ふことが云へるならば、東方佛教といふものが獨立して居る。日本人は外國のものを吸収して皆之を日本のものにして居る、それは日本の歴史の光明であらうと思ひます。佛教が矢張り外國のものでありますけれども、日本人は日本人の頭腦で日本化して日本的にして居る。それは千三百年の間に日本人の成した最大なる事業の一つではないか。日本人の精神的事業の著しいものであらうと、斯う云ふ様に私は見たいのであります。

佛教史で見ますると、南方佛教といふものは印度の阿輸迦王の事業のやうに思はれる。阿輸迦王が佛教を印度に弘め、南方地方に布教使を遣つて佛教を弘めた、それが今日の南方佛教の本をなして居る。又北方佛教といふのは、月氏國の迦膩色迦王の勢力に依つて弘まつたもので、それが支那へも來たのでありますから、北方佛教といふものは迦膩色迦王の事業であるやうに見られる。若し此意味で言ふならば東方佛教といふものは聖徳太子の事業であるやうに思ふのであります。推古天皇時代の佛教興隆の經營といふものが、日本の佛教の本を成して居る。其時から既に形勢が違つて居る。斯う云ふ風に見えるのであります。其事を先づ事實の上から申上げて見たいと思ふのであります。

日本の佛教の始といふものは、百濟から來たといふことになつて居る。其頃の朝鮮三國と日本との關係から見ると、日本は大そう強く、さうして朝鮮の方では高麗新羅百濟の三國が始終争つて、百濟が常に日本に對して援兵を乞ひ、日本の武力を借りて居つたやうであります。けれども日本の文物は到底三國に及ばなかつたやうである。武力の方は勝れて居つたけれども、文物の方は夙に支那の文明を受けて居る朝鮮三國の方が進んで居つた。それで彼我の間に文武の交換が行はれて居るやうであります。どうも武力では始終壓倒せられる所から、文物を以て日本に對して幾分か誇示しようと云ふ意味もあつたやうに思はれます。百濟王が日本に佛教を獻じたといふのもさういふ意味が籠もつて居るやうであります。表文を見ると大に佛教を讃めて居る。自分の國にはこんな尊いものがあると云ふやうに言つて、矢

張り文武交換の意味で、佛教を送つたやうである。さういふ場合でありますから、日本では稍不快を感じた人もあつたらしい。

實際は幾多の理由もあつたでしょうが兎に角佛教が渡來した時には問題があつて、四十年間といふものはその採否の就て議論が絶えなかつたのでありますが、聖徳太子に依つて其佛教と云ふものを日本に採用することに確定されたのであります。これが聖徳太子の事業の起點でありまして、又日本の佛教の第一歩であります。

當時我國に改進的思想と保守的思想とあつたのでありますが、聖徳太子は兩思想の上に立つて、純然たる改進主義を取つたものと思はれます。其改進主義の中心になるものは佛教であります。であるから聖徳太子は佛教と取つた、然るに佛教は朝鮮を経て來たものでありまして、其朝鮮の佛教といふものが何んなものであつたかといふことに就て心掛けて見たのであります。其事を少し御話しないと日本の佛教の性質といふものが解り難いのであります。

支那に於て北支那の佛教と南支那の佛教とが、この時代には少し異つた傾向があります。北支那では北方の諸民族が這入つて來ました今の蒙古滿州の地方に蕃興した民族が南下してゐました其民族が跋扈して漢族即ち支那の民族を壓迫してゐまして彼等諸民族が佛教を持つて來た。彼等が漢族に接觸するに至り佛教を傳播したのであります。北方の諸民族の方では經文の翻譯を盛んにやつて居る。それは鳩

摩羅什とか、曇無讖とか、佛馱跋陀羅といふやうな學僧が中心になつて居る。さうして佛教が學問風に興つて居る。それは南支那では違つてゐる。南支那の佛教は、學問もないことはないけれども實際風である、これは種々の理由がありましよう。三國時代以後十六國の分裂の頃から漢族が北方の諸民族に追撃せられて居る。所謂北狄に追詰められて居る。かゝる漢族の境遇が自ら其思想に影響を受けまして、そこに佛教が實際風に起つて居る。廬山の慧遠とか、南岳の慧思といふやうな高僧を中心にして、宗教上の練思修行をすることゝなつて居る。それは北方の諸民族の壓迫を受けた結果漢族が南方へ遷移してゐることとが此の如き佛教の傾向を馴致したのではないかと思ふのでありますが、兎も角も南支那の佛教は異つてゐた、これは注意すべき事實であらうと思ひます。

日本の佛教は朝鮮から來たのでありますが、朝鮮は元來支那の北方から佛教を受けて居る。即ち高麗は符秦の僧に依つて傳へられたのです。初めは朝鮮は北支那の佛教を受けて居る。所が後には海路の方の交通が漸く盛んに開けて居る。晋が南方に遷つて所謂建康に都する頃になつて南支那から文物が輸入せられたやうである。随つて朝鮮の佛教は南支那の佛教を受けて居る。六朝時代の佛教即ち齊梁陳等の佛教が大なる影響を與へたやうである。日本の佛教で見ると、所謂聖德太子の佛教とはどうしても六朝時代の佛教即ち齊梁陳等の佛教を受けて居る。それは太子の著述を見ても判かります。聖德太子の著述といふのは法華經、勝鬘經、維摩經の三部の註疏がある。これは研究を要すべきものでもありましよう

が、併し私は大體に於て彼の書物を認めるのであります。此註疏を見ると、確に六朝時代の佛教即ち齊梁陳等の佛教を受けて居るといふことが判かる。太子の行狀を見ますと益々その事實が察せられます齊梁陳等の帝王の行狀に比較して自ら領會せらるゝ所があります。それで南支那の文物が最初日本に輸入せられて居ると思はれます。六朝時代には佛教が大に興隆してゐます。齊の文帝、梁の武帝は名高い佛教信者であります。陳の武帝でも文帝でも宣帝でも皆熱心な佛教信者であります。

南支那の佛教は何う云ふ佛教であるかといふと、實際風である。もう一つは齊梁陳等の帝王が皆佛教を信仰し、之を普遍的に政治的に應用しようとして居る。彼等の事蹟が亦聖德太子に見られます、之は自ら關係があることと思はれます。日本の佛教は最初支那から傳はらずして、朝鮮から傳つたけれどもどうしても南支那の佛教であると思ふのであります。聖德太子の佛教を研究すると、南支那の佛教であることが判る、其南支那の佛教といふものが聖德太子に依つて日本に紹介されました。太子が自らそれを研究して日本の佛教の基礎とせられて居るのです。その後南支那の佛教といふものは彼地では大に形勢が變遷したのであります。日本の佛教の發達の本は確にこゝにあると思はれます。

先づ聖德太子の事業の上で、日本の佛教の特徴を見られる。それは何ういふ風に見られるかと云ふと私は二つの大なる發達點があると思ふ。其發達點は何かと云へば、一つは實際的方面の發達であり、もう一つは社會的方面の發達である。かう云ふ事を言ひたいのであります。佛教の實際的方面の發達とは

どういふことかと云へば、固より佛教は理論だけではない、宗教であるから必ず實際を有つて居る。けれども日本の佛教の實際的といふのは、特に注意すべきものであつて、社會的といふに結付いて居る。社會的といふのは少し語が十分でないかも知れぬけれども、世間的に普遍的になつて居る。山林へ引込んで獨りで修行するといふ様なことなく、世間の道德、世間の習慣に結び付くやうな傾向がある。所謂世間的教化とか世間的救済といふことがある。南支那の佛教にその様の傾向が見られるのであります。南支那の方では其發達が早く中止して了つた。それが日本に這入つて漸次發達して、さうして日本の佛教といふものが、鎌倉時代までの間に全く特別なる大きな形體を成立したものと思ふのであります。

さてその日本の佛教の實際的方面と云ひ、社會的方面といふは、どういふ事實であるかどういふ經路であるか。その發達を説明しようとするには、實は日本の佛教の歴史を一千餘年間に亘つて話さねばなりません。迎も今晚十分に説明せらるる事ではありません。それで最初の事實に見られるものは、何ういふことであるかと云ふことを一言するにとゞめねばなりません。これを御承知ありたいのであります。

實は日本の佛教は最初より實際的方面の事實が見られる。それは祈念である。つまり御祈禱です即ち佛、菩薩の靈驗に依りて幸福を求めやうといふことであります、これは一番初に出て來る事實です。百濟の聖明王の表文に「此法は能く無量無邊の福德果報を生じ云云祈願情に依りて乏しきことなし」かう云ふ文句がある。つまり祈念をする、即ち御祈禱をするといふことが最初に佛教の興隆する根原をなして居

る、此文句から見ると、此法は能く無量無邊福德果報を生ずといふは現世利益を意味して居る。又無上菩提を成辨すといふは來世得脱を意味して居ることであらう。それで先づ現世利益の祈念が行はれる。其次に來世得脱の祈念が行はれる。これは説明を要することでありませんが、現世利益の祈念即ち現世の禍を攘ふとか、現世の福を求むるとか御祈禱する、乍併現世は有限である。五十年百年で自分は死なねばならぬ、何人もこゝに思ひ到るのである。それで初は現世利益の祈念であつて、それが進んで來世得脱の祈念になつて來る。當時の信仰思想は佛像の銘文に依つて研究せらるゝのであります。佛像を造立して、病氣の平癒を祈念する、併ながら命數が盡くるものならば此功德を以て來世に利益を得たい。斯う云ふ意味の文句がある。つまり利益を求むる思想が現世に終はらないで來世に互る、これは當時の思想の上より見て注意すべきことであります。

古事記日本書紀等に依つて、太古の日本人の宗教思想と云ふものが見られます。所謂神靈を意識してゐる國民であります。然るに佛教が傳來して本來の宗教思想を衝動し、忽ち一種の色彩を添へたのであります。その著大なる發達に驚かねばなりません。この方面より觀察して當時の佛教の實際的方面の事實を解釋する必要があります。私は常に日本人の宗教思想の發達として、日本の佛教の發達を見やうとしてゐるのであります。今晚はその意義を十分に説明せられませんが、その佛教の發達と云ふのは單に教説理論を謂ふのではありません。このことを御了承ありたいのです。

初め欽明天皇の朝に佛教が渡來しまして、それから後數々騒動があつて、佛像が棄てられたり、佛殿が焼かれたりした。其時に黒雲が大そう起つたといふやうなことがあつて、人心が動搖したやうに見えるが佛教が渡來してから直ぐにその靈驗といふものが信ぜられ冥罰といふことが考へられて居るやうに見える。それから蘇我馬子が病氣になると直ぐに佛菩薩に病氣の平癒を祈禱したことがある。用明天皇が御病氣になられて、法師を宮中に御召入れになつて、御平癒を御祈禱になつた。それが動機となつて、物部氏と蘇我氏との軋轢が爆發するのでありますが、そこに佛教の實際的方面の勢力といふものが發展して來て居るのであります。厩戸皇子は四天王の像を刻んで之を持つて戰つて戰爭に出られ勝利を御祈禱せられて居る。そして戰勝の後に聖德太子は四天王寺を建立になり、蘇我氏は法興寺を建立した、乃て現世利益の祈念の結果が大なる事實となつて現はれて來た。即ち壯大な寺院が建立されることになつた、であるから、一方に於て佛教を採用するとか、採用しないとかいふ問題はあつたけれども其問題の中に佛教の實際的方面即ち御祈禱といふものがすん／＼盛行して居る。佛教は段々其方面の勢力を得て來て居る、推古天皇の時に來世得脱の祈念が顯著な事實となつてゐる。現世の幸福がこれで終はるならば尙來世に於て此幸福を得るやうにといふことを祈念してゐる。今日の語で言へば、生命の永存を願つて居るものでせう。飛鳥朝時代奈良朝時代等の來世教といふものは、江戸時代に於ける如く婆さまがカンカシンを叩いて極樂往生を願つたとは大に違つて居る。現世の幸福といふものを來世に繼續すると云ふ意

味であつた。有限の幸福を無限に敷衍しようといふ意味がある。人間は一生五十年で終るものでない、否終らすべきものでないといふ信仰が見えるのであります。推古天皇の時に、この偉大なる宗教思想の萌芽が見えるのであります。私はこれを矢張來世得脱の祈念といふのであります。佛教の教説論から云へば御祈禱とは見えないかも知れぬ。けれども私は祈念と見るのであります。所謂來世教といふものは來世の幸福を願求する御祈禱であると云ひたいのであります。

それから奈良朝時代に至りましては其現世利益の祈念と云ふものが個人的から國家的になります。自分一個の幸福を願求するのではない、これに依つて一國の幸福を願求するといふ國家的祈念と云ふものになる。佛菩薩の靈驗によつて個人の幸福を願求すると云ふことが更に進んで國家の幸福を願求すると云ふ思想に發達する。金光明經とか金剛般若經とか仁王般若經とか云ふやうな經典を見ると國家安穩と云ふ文句がある。是等の經典が讀誦せられて、現世利益の祈念と云ふものが個人的から國家的になる。それが國分寺の創立と云ふものになるのです。國分寺と云ふのは今では土地の名稱位にして遺つて居りますが、毎國に官寺を創立して國家の祈禱道場にせられたもので、聖武天皇に依つて完成せられた大事業であります。さう云ふ國家的祈念になるのであります。

それから世來得脱の祈念と云ふことは個人的であつて、それは大に宗教的になります。今お話し申したやうな來世得脱の祈念と云ふものは、後世の江戸時代に於ける一部の愚俗が極樂往生を願つて居る意

味とは違ふのであります。即ち淨土教と云ふものは個人的であるが極めて強大な信仰を有つて居る。奈良朝時代の淨土と云ふものは、彌勒菩薩の淨土とか、釋迦如來の淨土とか、藥師如來の淨土とか、靈山淨土とか補陀洛淨土とか、いろ／＼ある。其れに依つて奈良朝時代の人々が現世の幸福を來世に繼續しやうと云ふ信仰が見えるのであります。從來佛教の歴史の上では奈良朝時代は現世佛教の時代などと云はれて居つて、來世得脱の祈念が盛行してゐたと云ふことは認められてゐない。所が私の研究では、文書圖書等に依つてその事實が見られます。成程現世利益の祈念は國家的の大經營であつた。諸國の國分寺の造營總國分寺即ち東大寺の大佛の經營等に國家の財帑を傾けて居る。であるから著大な歴史的事實として見られてゐます。一方の來世得脱の祈念と云ふものは個人的であるからさう云ふ大經營はないけれども、普遍なものであり熱烈なものであつたと云ふことが種々の材料に依つて見らるゝのであります。

佛教の信仰から觀ると現世利益の祈念と云ふものは必ず來世得脱の祈念に至らねばならぬと斯う思ふのであります。即ち有限な利益を求むる思想といふものは必ず無限の幸福を求むる思想に至らねばならぬのである。而して益々其宗教思想が偉大且深遠となつて來る。奈良朝時代の文明と云ふのは爾來全く現世教である。其時代の文明は現世教の結果であると觀察されて居つたのはそは一部分の觀察であると思ひます。現世だけでは何うしても淺薄であると云ふことが信仰せられて深遠になるのであります其は奈良朝時代の來世教と云ふものを特別にお話せねばならぬ事でありすが、私は奈良朝時代の佛教と

云ふものが現世教であつたと云ふ事に就ては異議を申立てる。どうも來世教と云ふものが思想上大なる勢力であつた來世と云ふ信仰があつて始めて強烈に偉大に深遠になるので、この宗教思想が奈良朝文明の背面を形成して居るものと思ふのであります。實際的方面の祈念と云ふものは日本に於てさう云ふ様に發達して來たのでそれは確に日本に於ける特別の發達であると思ふのであります。

それから尙一つは社會的方面の發達であります。聖徳太子の事業がやはり社會的發達の方面の基礎を成して居ると云ふことに見えるのであります。即ち佛教が社會的に活動し社會的に同化して之に依つて世間的の勢力となり普遍的の事實となつて居る。其れを私は社會的方面の發達であると思ふのであります。一體佛教の實際的方面の發達と云ふことは印度に於ても支那に於ても見られます。佛教と云ふものは宗教である。宗教と云ふものは實際の修行をするのである、唯々理論を事とするものではない。それであるから何うしても實際的でなければならぬ。けれども社會的であると云ふことは特に注意すべきことであります。印度にも支那にも著大な事實が見られない、寧ろ日本に於て始めが發達したので、日本佛教の特徴ではないかと思ふ。阿輸迦王の佛教の經營を見ますと、其經營は佛教の社會的方面の發達を企圖されたやうに思ふ。どうも阿輸迦王は佛教を社會的方面に應用された形迹が見られるのであります。けれども其れは印度には發達をしなかつた。所謂社會的方面の發達と云ふものは印度の佛教には無いのであります。今日南方佛教などは全然社會的方面の發達を缺いて居る様に見える。併し私は南方佛

教の事に就いては深い智識を有つて居りませぬ、錫蘭や暹羅へ往つて視察した譯でもありませんから詳しく存じませぬ。けれども、どうも社會方面の發達を缺いて居る様に思ふのであります。

佛教の教理から觀れば諸宗派は皆實際的方面の發達を爲すべき理由を具備して居るけれども、どの宗派でも社會的方面の發達を爲すべき理由を具して居るとは見えない。佛教では小乘大乘といふことを申すが、其小乗教と云ふものは何うしても社會的に發達する理由を有つて居らぬ様に思ふのであります。所謂大乘教の諸宗派に至つて社會的に發達する理由を有つて居ると思ふのであります。小乘大乘と云ふことは議論のあることでありませうが、併し私は大乘佛教と云ふものに依つて始めて社會的方面の發達がせられるものと思ふ。即ち大乘佛教は利他的、慈悲的、救濟的である。所謂菩薩行である。其菩薩行であると云ふ意味から社會方面の發達と云ふことが出て來るのである。であるからして、日本の佛教が純然小乗教ばかりであつたならば此社會的方面の發達と云ふことは見られなかつたのである。併ながら日本の佛教は始から大乘教である。大乘の教義を有つて居る。其大乘の教義が即ち社會的方面に發達すべき根柢であると思ひます。けれども、これは教義から觀察したのであつて、實際は矢張り南支那の佛教で六朝時代の佛教即ち齊梁陳等の佛教である日本の佛教の社會的方面の發達の由つて來る所は成程教理にあらうけれども、實際は矢張り南支那の佛教の傾向を有するからであつて、聖德太子以來益々發達することになつたものと斯う思ふのであります。

聖徳太子の著述が先程申した三部ある。三部の經文の註釋書を書かれましたが、其三部の中で最も多く維摩經に力を用ゐられて居る。維摩經と云ふのは。在家の居士維摩といふ者が中心になつてゐる維摩詰は佛教を修行して居つたけれども出家ではない。在家の居士が佛教を説いて居る。それが維摩經である。而して聖徳太子が維摩經に力を用ゐられて居られる所を見ると、どうも太子は維摩に私淑して居られたのではないかと思ふ。註釋書を見るとその意向がほの見えて居る。そこで聖徳太子の一代の經營は佛教を社會的に解釋し社會的に應用しやうとして居られる。自ら維摩を以て任じ、さうして大乘の至極といはれる所の法華經の註釋書をも書いて居られる。大乘の教理は利他的である慈悲的である、救濟的である其れを以て立つて居られる。さうして社會的に應用しやうとして居られる。憲法十七條の第一條に「篤敬三寶三寶者佛法僧也」といふことを云つて居られる。つまり佛教の道德に依つて世間的道德を養成し國家的政治を助成しやうとせられた。此太子の經營が着々として事實に現れて、佛教の社會的方面の發達が段々見られて來たやうに思ふ。

佛教の社會的方面の發達を研究すると常に中心になつて居るものがある。それは慈悲の思想である。慈悲の思想が種々の事實となつて表現して居る。これが大乘の精神を發揮させて居るのでありますがいつでも其れが社會的方面の發達の主力をなして居るのであります。聖徳太子の斯ふ云ふ計畫に由來したことでせうが夙に佛教が世間的教化をなして居ることが見えるのであります。推古天皇が御崩御にな

つて皇位繼承の紛擾がありました際に山背王を推戴する者が多かつたのでありますが、其時に山背王が自分の父（聖德太子）が諸惡莫作衆善奉行と云ふこと即ち諸の惡は作す莫れ諸の善は奉行せよと云ふ文句を教へて下さつた、其佛説を聞いて居る、今皇位繼承の事に就いて、自分か私情を以て益々紛擾を醸して諸人を苦むるに忍びないと。斯う云ふことを言はれて自ら引退なされて居る。これはいろいろ批評の仕方もありませうけれども、どうも其所には、慈悲の思想と云ふものが佛教の文句を引いて言表はされて居る。其後に至つて入鹿が山背王を殺害しやうとした騒ぎがあります。歴史上名高い話であります。其時にも諸臣は山背王に對つて、一擧して入鹿を討伐なさるが宜いと申上げた所が、山背王は肯かれずして、自分一身の故を以て百姓を傷殘してはならぬとて、遂に自害せられましたそれは氣弱いのでありませうが、やはり慈悲の思想と云ふものが見えます。又孝德天皇の朝に右大臣蘇我石川麿と云ふ人が讒言に遭ふて、山田寺と云ふ寺に逃れた。さうして此寺は天皇の御平安を祈禱する爲めに石川麿の子興志が造營中である、石川麿は自分は今讒言に遭ふて此寺に逃れた。天皇の御平安を御祈禱する爲めに建立する此寺に來て自分の潔白を明にして死なうと思ふと言つた。興志が之を聞いて、イヤ死ぬには及ばぬ、先づ追ふて來た者に對して辯明すればいゝと言つたけれども、石川麿は自ら佛殿の戸を開いて、願くば生々世々君王を怨まずと言ひ遂に自害してしまつた。佛教が渡來してから斯う云ふ事實が續々擧つて居る。どうも佛教が夙に世間的教化をなしたふとが判るのである。それは即ち聖德太子が佛教を社會の方

面に應用しやようとせらはた計畫が着々として成功して居るものと思ふのであります。

又社會的救濟の事實がある。聖德太子が四天王寺に施藥院、療病院、敬田院、悲田院と云ふものを設立した。それから奈良朝時代に於ては大に慈善事業と云ふものか起つた。光明皇后は皇后宮職に悲田施藥の兩院を置かれて、佛教が世間的救濟に勢力を得て來たのであります。

奈良朝時代に於ける佛教主義の慈善事業と云ふものは新材料が擧つて居ります。正倉院古文書を拜見致しますと、聖武天皇が盧遮那佛に藥草を捧げて、其藥草をば僧綱が管轄して貧民に分與した時の御願文などが遺つて居ります。其御願文を讀むと大佛を供養した後に、大佛の慈悲を傳ふる意味で貧民に分與せられたものです。其藥草が囊のまゝ遺つて居りますが、奈良朝時代に佛教主義の慈善事業の盛であつたことが分ります。

以上は佛教の渡來してから二百餘年間の歴史に就いて所謂二大發達の形勢を觀察したのであります。即ち飛鳥時代奈良朝時代の佛教に於ける發達の形勢を略説したのであります。固よりその詳細は盡くされません。その後平安朝時代鎌倉時代の佛教に於ける發達は更に著大なものであります。今晚はたゞ一言するにとゞめねばなりません。

平安朝時代に於ては傳教大師弘法大師の如き高僧が出て天台宗眞言宗と云ふものが興隆した。佛教の歴史から言へば、天台宗眞言宗が日本へ傳來して、日本でさういふ新しい宗門が開立せられたのであつ

て天台宗が傳教大師に依つて興り眞言宗が弘法大師に依つて興つたのである。それは勿論それに相違ない。けれども天台宗や眞言宗の興隆したのは新事實ではあるけれども決して新思想ではない。奈良朝時代から繼續して居る佛教の實際的方面の發達社會的方面の發達が傳教大師弘法大師の事實に依つて新勢力を得たのであります。天台宗や眞言宗の開立は新事實ではあるけれども新思想ではない。飛鳥朝時代奈良朝時代に於ける現世利益の祈念と云ふものは密教即ち眞言宗が傳來して益盛大になつた密教が御祈禱の作法を傳へた。從來の作法では利益がない、斯う云ふ作法に依らなければならぬと云ふ様に説いた。天台宗の方でも然うである。全然新思想ではない。天台宗の觀心門はが淨土教禪宗などの發達を見ることになる。殊に來世得脱の祈念が天台宗の觀心門に依つて新勢力を得たことは注意すべきことである。

それから傳教大師に依つて大乘戒と云ふものが唱へられた。大乘戒は佛教の戒律の大乘思想を現はして居るのである。利他的戒律である、精神的戒律である。さうして聖德太子の佛教と云ふものがこの大乘戒と云ふものと結付いて益發達して居ると見らるのである、而して社會的發達の方面と云ふものが僧侶の風儀の上に現はれることとなつた。それで益世間的になり普遍的になつて來た。それが一方より現れば日本佛教の墮落の原因を成すので大に弊害を生ずることとなつた。

肉食妻帯と云ふものは親鸞聖人が始めたやうに思はれて居りますが、其實は決して然うでなくして、

平安朝時代に既に一種の寺院生活をして妻帯して居る者は少くない。殊に天台宗から出て居る僧侶には大に妻帯が行はれて居る。例へば奥州の中尊寺などは平安朝時代から子孫相續である。それは成程或意味から言へば墮落でありませうけれども、私は日本佛教の社會的方面の發達であると見ようとするのであります。兎も角も肉食妻帯と云ふことが行はるには理由と見らるゝものがあります日本佛教の特徴として見たいのでありまして、その事實の根本が墮落であるとは言へないと思ふのであります併し大に弊害を生ずることゝなつたことは認めねばなりません誤解ないやうにせられたいのです。

鎌倉時代に至りますと所謂二大發達は具體的事實になつて、淨土宗とか日蓮宗とか真宗と云ふやうな宗門が流敷せられます。

實際的方面の發達と云ふことが神佛一致の思想と云ふものを醸成して居る。神と佛と一致すると云ふ思想です。日本の文明と云ふものは其思想から現れて居る。この神佛一致と云ふことは大に説明を要することでありませうが、併し日本の文明は此思想から離れて發達はして居らない、いつでも神佛一致を根柢にして居る。今一つは社會的方面の發達と云ふことが眞俗一致の思想といふものを醸成して居る。眞と俗との一致です。日本の佛教の特徴を爲してゐる是等の二大思想が日本文明の中軸の思想であります鎌倉時代に至つて是等二大思想が著大な事實になつてゐる。

何等の興味もない、ゴテ／＼した話でありますが、先づ日本佛教の二大發達と云ふことに就いて最初の狀況を略説して聽いて戴いたのであります。失禮いたしました、これで止めます。

伴信友

事しあらば君が御楯となりぬべき

身をいたづらにくだし果てめや